

保育士養成校における 施設実習の効果についての一考察

佐藤 幸子

1. はじめに

保育士を目指して短大の養成校での学びを選んだ多くの学生たち。その学生たちが保育実習を経験することで、大きく成長する姿を目の当たりにすることが多い。しかし一方、保育実習では成果が見えにくい学生もいる。実際に保育実習指導という講義を通して、保育実習の重要性を伝えるのだが、その中での「施設実習」が必修になっていることを伝えることの難しさも感じる。なぜなら、学生たちは保育園の保育士になることを夢見て入学してくるのが大半だからだ。さらに卒業後の進路として当然のように保育園の保育士になると信じている保護者も多い。

このような状況の中、保育士資格取得に必要な施設実習では、「なぜ保育士資格に施設実習が必要か」という確認から実習指導が始まる。

2. 研究の目的

保育士養成校での保育士免許取得には3回の保育実習が必修となっている。3回の内訳は保育所実習と施設実習が各1回、3回目の保育実習は保育所実習（保育実習Ⅱ）と施設実習（保育実習Ⅲ）の選択になる。学生は卒業後の進路を念頭に実習先を選択するのだが、卒業を目前にした最後の保育実習は、2年間の保育実習の集大成と言っても過言ではない。

では、保育実習Ⅰの反省は保育実習Ⅱ・Ⅲにどのように生かされるのか、自己評価にはどのように表れるのか、その関係性に何らかの傾向があるように思われる。そこで、筆者が担当している保育実習Ⅲを選択した学生の学びを様々な角度から検証し課題を見つけることにより、今後の保育実習指導の役立てることを本研究の目的とする。

また、3回目の保育実習で施設実習を選択した学生が、卒業後の仕事にどのような影響があるか、実習指導の中でどの時点の指導が有意義であり、学生の資質向上に役立つのかも併せて検証する。

3. 研究の対象と方法

[対象]

信州豊南短期大学幼児教育学科卒業生のうち保育実習Ⅲ（施設実習）を選択した17名

[方法]

- ①施設実習後（Ⅰ・Ⅲとも）、実習後レポートで反省・課題について記述
 - ②保育実習Ⅰ、保育実習Ⅲとも実習後に自己評価実施
 - ③実習先施設による実習評価
 - ④実習ノート確認後、個別面談を実施
 - ⑤施設による実習評価表、自己評価表、レポートの記述内容、実習ノートの記述内容
実習後個別面談による内容の比較検証
 - ⑥卒業生へのアンケート実施
- 以上の内容を比較し、研究の目的に即して検証する。

[評価表について]

・評価項目（保育実習Ⅰおよび保育実習Ⅲ）

<表 1>

評価項目（観点・内容）	実習Ⅰ	実習Ⅲ
I. 入所児（利用者）とのかかわり	/	/
入所児（者）に積極的にかかわることができたか	○	○
入所児（者）との接し方は適切であったか	○	○
入所児（者）を理解するために工夫・努力する態度が見られたか	○	○
II. 入所児（利用者）への理解とかかわり	/	/
入所児（者）に対する言葉使いは適切であったか	○	○
入所児（者）の個性や特性を理解したかかわりができたか	○	○
個別支援計画の内容や役割について学べたか	/	○
III. 実習記録	/	/
記録として丁寧に、適切な表現がなされているか	○	○
記録として気づきや考察など十分な内容であるか	○	○
IV. 実習態度・姿勢	/	/
出勤時間や注意事項等の規律は守れたか	○	/
言葉使い、挨拶、身だしなみは適切だったか	○	○
実習生らしく学ぶ姿勢で、積極的な態度で実習できたか	○	○
指導職員からの指導に素直にきちんと対応できたか	○	/
職員の指導に素直に対応し責任のある態度がとれたか	/	○
保育士の仕事内容と職業倫理の理解は学べたか	/	○

注) ○印項目が、各実習における評価項目

・評価について

各項目の評価欄に以下の4段階で、職員所見欄にはその理由を記述
 なお、本稿では評価を数値化するため、それぞれの評価は以下のような
 数値とする。

- A：優秀（よくできた）：7点
- B：普通（一応できた）：5点
- C：努力を要する：3点
- D：不合格：1点

4. 結果と考察

本校所在地である長野県では、保育実習Ⅰ（施設実習）の実習施設を学生が希望し決定することはできない。保育士養成校と福祉施設との調整を当番校がしながら、最終的に実習施設が決定する。学生は決められた実習施設に実習生として初めて赴くことになる。実習施設としては乳児院、児童養護施設、障がい者支援施設がほとんどだが、その中でも特に障がい者支援施設は「その施設を知らない」ことから不安を持ったまま実習が始まる。

[1] 保育実習Ⅰでの施設評価と自己評価（〈表2〉参照）

①施設評価が[A評価]の場合

実習Ⅰでは施設評価が[A評価]だった学生は自己評価を低くする傾向にあることが分かる。施設評価が[A評価]だった学生8名すべてが自己評価を[B評価]にしている。その中でも、たとえば学生Aは施設評価が平均で6.82にもかかわらず、自己評価は5.36である。Aは自己評価で、積極的にかかわりや接し方、言葉使いや特性理解、実習記録等で[B評価]をしている。他者との比較ができないため、自分自身では“きちんとできたと思う”という意味でB評価（普通：一応できた）の記述になっている。

また、施設評価が6.45と高かった学生Bは自己評価を5.72としている。Bは実習記録について、施設評価では「丁寧に書かれていた」ということで[A評価]だったが、自己評価では「漢字を間違えて指摘を受けたが、漢字を調べるなどの対策が必要だった」と反省の上で[B評価]にしている。また実習態度について、施設評価は[A評価]だったが、自己評価では「ときどき、ため口になってしまったのもう少し敬語対応ができるようにしたい」と[B評価]にしている。

②施設評価が[B評価]あるいは[C評価]の場合

では、施設評価がB評価の学生は自己評価をどのように考えたのだろうか。やはり施設評価より自己評価が低い学生が多い。

学生Cは、施設評価が5.72だったが、自己評価は4.45だった。Cは利用者との関わりで、「積極的には話しかけ関わることができたが、気持ちを理解するところまではいかなかった」と反省している。しかし、施設はその積極性を高く評価（項目ではA評価）している。ただ、実習記録では誤字脱字の多さを指摘され、評価が低くなっている。

学生Dは、関わり方で評価され、施設評価は5.55になっている。しかし「実習生という立場で、どこまで注意などを言えるのか、悩むことが多かった」とのことで、自己評価は4.45になっている。また、実習記録では施設が「一生懸命に記入している様子はあったが、内容が読み手に伝わりにくかった」と所見として述べている。Dも「省いてしまうことが多く、具体性に欠けていた。」と述べている。双方とも、同じことを述べているが、その評価として施設はC評価、学生本人はD評価にしている。

さらに施設評価がC評価だった実習生がひとりいる。学生Eは施設評価が3.18で自己評価が4.82だった。つまり施設評価より自己評価が1.5も高かったことになる。その理由はどこにあるのか。初めての施設実習で「利用者の名前を覚えることが気になり、関係性を構築する姿勢が見られない」など施設からの評価は低い。Eも「関わっていくより、観察をしている時間が多かった」という自己評価で「何となく実習をしているという感じだった」と反省している。結果的には自己評価もC評価にしているが、実習前から不安を抱いていたEは、それなりに頑張れたことについては評価している。不安を抱えたまま実習に入り克服できずに日にちばかりが過ぎていく学生にとっては、辛い実習になってしまったことがうかがわれる。総合所見には「自らの発信が苦手で、相手からの発信に気づけるのも遅かった。実習の中で、自分が学ぶことに気づいてからはやっと笑顔が見られるようになった」と記述されている。筆者はEの不安を解消させるため、実習開始から3日目に訪問指導を行ったが十分な指導

ができなかった。

保育実習Ⅰでは自己評価を[A評価]にする学生はおらず、初めての施設実習ではどこまでどのように実践すれば良いのか、自分自身の実習が良かったのか否か等がわからないため、“一応できた”という[B評価]にしたと思われる。筆者が行った実習後面談で、実習ノートや施設評価について詳細に説明したことで、のちに行う保育実習Ⅲでの自己評価向上につながったと思われる（〔2〕参照）。

保育実習Ⅰ（施設実習）での施設評価と自己評価 <表2>

項目内容	学生A		学生B		学生C		学生D		学生E	
	施設	自己	施設	自己	施設	自己	施設	自己	施設	自己
積極的にかわり	7	5	5	5	7	5	7	7	3	3
適切な接し方	7	5	5	7	7	5	7	5	3	5
理解のための努力	7	7	7	5	7	3	7	5	3	3
言葉遣い	7	5	7	7	5	5	5	5	3	7
個性や特性の理解	7	5	5	5	5	3	5	5	3	5
丁寧な記録、適切な表現	5	5	7	5	1	3	1	1	3	3
気づきや考察	7	5	7	5	3	3	3	1	1	3
出勤時間等の規律	7	5	7	7	7	5	5	3	5	7
挨拶や身だしなみ	7	5	7	7	7	3	7	7	3	7
学ぶ姿勢と積極的態度	7	7	7	5	7	3	7	5	5	5
指導への素直な態度	7	5	7	5	7	3	7	5	3	5
総合評価	7	5	7	5	5	5	5	3	3	3
平均	6.82	5.36	6.45	5.72	5.72	4.45	5.55	4.45	3.18	4.82

〔2〕 保育実習Ⅲでの施設評価と自己評価（<表3>参照）

①施設評価が[A評価]の場合

実習Ⅲの施設評価が[A評価]だった学生が自身をどのように評価しているのか

検証する。

施設評価が[A評価]だった学生 9 名のうち、自己評価[A評価]は 3 名 (33.3%)、[B評価]は 5 名 (55.6%)、[C評価]は 1 名 (11.1%) だった。

施設評価で最も高かった学生は 6.5 で 3 名だった。その中で学生 E と学生 C は自己評価を 5.17 としている。この両名は実習 I において〈実習記録〉の項目が施設から[C評価]あるいは[D評価]が付けられていた。それぞれの自己評価も低く、その反省から学び、課題を整理し実習Ⅲに臨んだ。その結果、施設から高評価を受けるまでに成長したと思われる。

E は実習 I で、利用者とのかかわりが少なかったことで気づきもなく、質問もできなかったという反省だった。また、自分の気持ちは態度や表情から相手に伝わってしまうことを体験したと述べている。E にとってこのような実習 I は辛い経験でしかなく、実習後面談でも自身の実習を評価する言葉は一切なかった。しかし、この貴重な経験は実習Ⅲで活かすこととなった。その表れは実習Ⅲの目標を高く設定するのではなく、自分に合った自分らしい目標を設定したことに見られた。その結果、施設からは「利用者との積極的かかわりや適切な接し方」で[A評価]を受けることとなった。実習指導職員からは「E のゆったりかかわる姿勢が利用者に安心感を与える」とまで評価され、実習 I での課題であった〈実習記録〉についても深くかかわったことの具体的記述ができ、[A評価]を得ることとなった。本当の気持ちをうまく伝えられない利用者に寄り添い、利用者の立場になってコミュニケーションをとった姿は、実習生としての理想的態度として施設職員や利用者からも評価された。

C は実習 I での施設評価が低いことに気づかなかった学生のひとりであった。指導職員から厳しいことを言われ、初めて自身の実習に対する意識の甘さに気づくという経過をたどった。本人も指摘されるまで、実習記録には観察・メモ・考察が必要である、ということあまり考えていなかった。訪問指導ではメモを取って具体的に書くよう伝え、残りの実習期間に期待するしかなかった。このような反省から実習Ⅲでは、実習ノートの内容を意識して、観察のみ

ではなく自分の思いやかわり方の意味・目的を深く書くよう心掛けたと実習後面談では述べている。実習Ⅲでのこの経験は高評価につながり自信が付いたとも述べている。Cの成長は反省から課題を見つけ、その課題を意識して忠実に実践したことにあると思われる。実習報告会ではメモを見ることなく、自分自身の生きた言葉で実習中のさまざまなエピソードを楽しそうに発表する姿にも表れていた。

施設評価が6.5と最も高かった学生Fは前述のEやCと同様、自己評価を低くしている。しかし彼らよりさらに低い自己評価4.83であり、施設評価との差は1.67もある。この差はなぜ生まれたのだろうか。Fは実習Ⅰと実習Ⅲとは同じ種別の施設で実習をした。実習Ⅰで利用者にある程度慣れた上で実習Ⅲを行ったと思われる。しかし実際は、同じ種別でも施設が異なることで対照的な施設実習ができた、と実習後に述べている。同じ種別での実習Ⅲだからこそ、自分自身の目標を高くしたことで、より厳しい自己評価をしたと考えられる。特に積極的かわりについては実習Ⅰで「A評価」にしていたにもかかわらず、実習Ⅲでは「C評価」としている。目標や課題に対してできなかったことに焦点を当てて自己評価したことが、施設評価との差を生んだことと思われる。施設職員からは「利用者のことをよく見ていて感心した。自分でも工夫し、学んだことを活かそうとする姿に好感がもてた」とのコメントも寄せられ、充実した実習ができたことをうかがわせた。筆者が検証した実習ノートでも、実習そのものが非常に充実したものであったことがうかがわれ、施設評価の高評価につながったことと思われる。

施設評価6.5の3名に続き、6.33を得た学生も3名いた。そのうち学生Gは自己評価が5.33だった。Gの自己評価の特徴は、利用者との接し方と実習への積極的学びについてC評価をしていることである。Gは実習Ⅰでは積極的かわりや利用者の特性の理解が足りなかったと指摘されC評価を受けていた。実習開始当初、利用者への接し方に悩みながら数日が過ぎたという経験もあり、前述のような施設評価にもつながったと思われた。しかしそのような状況でも

自分自身としては頑張ったという意識があった。このような実習Ⅰでの経験から、意識の中で実習Ⅲでの目標も積極性に重点をおいたと思われる。実習中、“積極的なかかわり”という言葉がどのような状態を意味しているかなど、考えながら接していたことが実習ノートからもうかがえた。自分自身が重点課題として設定したからこそ、自己評価を厳しくしたものと思われる。

学生Hは施設評価が6 (A評価) だったにもかかわらず、自己評価を4.67 (C評価) にしたことは特筆すべきことである。Hは実習Ⅰでは施設評価が6.45(A評価)、自己評価が6.09 (B評価) だった。それに比べ実習Ⅲで自己評価を低くした意味は何だったのか。

Hは実習Ⅲをするにあたり、実習Ⅰでの経験を活かし、利用者の興味を感じ取った上で自ら活動を提案したり声掛けを工夫するなど、利用者とのコミュニケーションの充実を目標に掲げていた。そのためにはどのようにしたら良いか実習前に作成したマインドマップにもよく表れていた。また、「積極的とはどういうことなのか」について考えさせられたと述べている。利用者一人ひとりの特性と向き合う中で、積極性が必ずしも良いこととは限らないことを学んだが、その意味では自身のかかわり方について反省することが多かったと振り返った。一方、一人ひとりとの関わり方を目標に掲げて、コミュニケーションの難しさや利用者個々への支援の必要性などをしっかり学び実践したことは施設での高評価につながったものと思われる。

保育実習Ⅲ（施設実習）での施設評価Aと自己評価

<表3>

項目内容	学生E		学生C		学生F		学生G		学生H	
	施設	自己	施設	自己	施設	自己	施設	自己	施設	自己
積極的かかわり	7	5	7	7	5	3	7	5	7	3
適切な接し方	7	4	7	5	7	5	5	3	7	5
理解のための努力	5	4	7	5	7	5	7	7	5	5
言葉遣い	7	5	7	5	7	3	7	5	7	5
個性や特性の理解	5	5	7	5	7	5	5	5	5	5

個別支援計画の学び	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
丁寧な記録、適切な表現	5	6	5	5	7	5	7	5	5	3
気づきや考察	7	5	7	5	7	5	5	7	5	3
挨拶や身だしなみ	7	7	7	5	7	5	7	7	7	7
学ぶ姿勢と積極的態度	7	7	7	5	7	5	7	3	7	5
指導への素直な態度	7	5	7	5	7	7	7	5	7	5
保育士の仕事理解	7	4	5	5	5	5	7	7	5	5
総合評価	7	5	7	5	7	5	7	5	7	3
平均	6.5	5.17	6.5	5.17	6.5	4.83	6.33	5.33	6	4.67

②施設評価が「B評価」の場合

施設評価で「B評価」あるいは「C評価」だった8名のうち自己評価が施設評価より低くした学生は2名のみだった。施設評価が「A評価」だった学生とは大きな違いがあった。この違いは何なのか。

学生Iは施設評価5.17より自己評価が4.83と、低い評価をしたひとりだが、他の施設「B評価」の実習生とは大きく異なっていた。Iは実習Iと比較して「成長している部分を感じられず、目の前の実習をこなしていくことで精いっぱいだった」と反省している。しかし、施設評価では利用者への理解や実習記録への気づきや考察については「A評価」を得ている。一方、「保育士の仕事内容と職業倫理の理解を学ぶ」という実習Iの評価項目にはない項目で「C評価」になった。I自身が実習テーマに掲げた「施設での保育士の役割を知り、具体的な活動につなげる」に関して、本人はそれなりに努力したが、施設からは物足りなかったとの評価になったと思われる。Iの実習Ⅲに向けた思いは前述①「施設評価が「A評価」の場合」の実習姿勢に近い。

もうひとり施設評価がB評価(5.17)で自己評価(5.0)が低かった学生Bは実習テーマのひとつに「障がい者施設で保育士としての自己課題を明確にすること」を挙げていた。B自身が「C評価」を付けた項目が「記録として気づきや考察

など十分な内容である」だった。筆者が行った実習ノートの確認においても確かに記録に残す気づきや考察は不十分であった。しかし一方、利用者の気持ちに寄り添った対応やコミュニケーションの工夫では、2回目の施設実習での充実がうかがわれた。

学生Iや学生Bは、実習I・IIIとも障がい者支援施設で実習を行っている。その結果、1回目の反省や課題をしっかりと自分のものとして、2回目の実習IIIでは、より厳しい自己評価になったと思われる。

施設評価(5.0)より自己評価(5.83)が高い学生Dは実習Iでは児童養護施設、実習IIIでは障がい者支援施設で実習を行った。Dは実習Iでの課題が多く、自己評価でも「実習記録での記述・考察・適切な表現・丁寧さ」でC評価を付けていた。筆者は実習記録の注意事項や書き方を具体的に指導するとともに、社会人としての基本的態度である時間厳守などについても嚴重注意し、実習に送り出した。しかし結果としては十分ではなかった。本人の意識の中で施設が求める実習生としての姿勢より「自分は頑張った」という意識が勝ったと思われる。

学生Jも施設評価(3.18)より自己評価(4.82)を非常に高くした一人だ。特に施設評価についてはこれまで関わった実習生の中でも最も低い数値になっている。Jがなぜ、評価が低くなったのか。実習直後のレポートでは「入所児と早く仲良くなりたかったので、話しかけすぎた」「入所児から引かれてしまい、仲良くできなかった」などの言葉が並んだ。実習IIIでの目標のひとつに「入所児一人ひとりの特性を理解し、入所児たちと深いかわりができるようにする」を掲げていた。その目標を意識しながら“積極的に”関わった結果、引かれてしまったり拒否されたりしたようだ。Jは“積極的なかわり”について、距離を縮めることと解釈したため、入所児からは敬遠され、施設からの評価も低いものになっていた。また実習中、施設の指導担当職員から指導を受けたり実習ノートで助言を受けたりしてもその意味を理解するまでには至っていなかった。そのために施設評価より1.5点も高い自己評価をする結果となった。実際に実習後の個人面談で、指導担当職員が伝えたかったことや積極的なかわりの

意味について、筆者が具体的に伝えて初めて自分自身の言動を反省するまでに至った。前述①の学生Hのように積極的にかかわりについて自分なりに考えたことと、字面のみで判断し行動したJとの差が出てしまった。また、自分自身の性格などの自覚も不足しており、自覚のないままの言動がすべてに影響し、Jの実習生としての評価が低くなったことがうかがわれた。

保育実習Ⅲ（施設実習）での施設評価Bと自己評価

<表4>

項目内容 詳しい内容は<表1>	学生I		学生B		学生D		学生J	
	施設	自己	施設	自己	施設	自己	施設	自己
積極的にかかわり	5	5	5	5	5	7	3	7
適切な接し方	5	5	5	5	5	5	3	1
理解のための努力	7	5	5	5	5	5	3	5
言葉遣い	7	5	5	5	5	5	3	3
個性や特性の理解	5	3	5	5	5	5	3	5
個別支援計画の学び	5	5	5	5	5	7	3	7
丁寧な記録、適切な表現	5	5	5	5	5	5	3	5
気づきや考察	7	5	5	3	5	5	3	5
挨拶や身だしなみ	5	5	5	7	5	5	5	7
学ぶ姿勢と積極的態度	3	5	5	5	5	7	5	5
指導への素直な態度	5	5	7	5	5	7	3	5
保育士の仕事理解	3	5	5	5	5	7	5	5
総合評価	5	5	5	5	5	5	3	5
平均	5.17	4.83	5.17	5	5	5.83	3.5	5

[3] 保育実習Ⅰと保育実習Ⅲとの施設評価・自己評価の比較

2年間の保育実習集大成として施設実習を選択する学生は、自分自身で実習希望施設に依頼する。しかし、他の養成校がすでに実習依頼をしており、本学学生が希望通りに施設が決定することは少ない。そのような状況の中でも何とか実習施設を確定させ、保育実習Ⅲに臨む。

また、施設実習ⅠとⅢとでは種別が同じとは限らないし、同じ種別での実習としても異なる施設を選択するように義務付けている。つまり、実習ⅠとⅢの組み合わせが、児童養護施設と障がい者支援施設、Ⅰ・Ⅲとも児童養護施設で別施設、Ⅰ・Ⅲとも障がい者支援施設で別施設、他の児童福祉施設との組み合わせなどがある。2回の施設実習では実習施設に評価が任されていることで、評価基準が一定ではない場合があり、単純に比較することはできない。しかし筆者が実習ノートを詳細に確認することで、実習における施設評価がどのような基準でなされたかについても検証することが可能である。

①実習Ⅰ・Ⅲとも同じ種別の場合

実習生17名のうち、実習Ⅰ・Ⅲとも障がい者支援施設の実習生は5名、2回とも児童養護施設(乳児院・障がい児施設を含む)での実習生は5名であった。同じ種別の場合で考えられることは“慣れ”と“利用者の雰囲気を知っている”であり、経験がいかに重要であり経験からゆとりが生じることも実習での大きな成果であると言える。実際に初めて施設実習に行った学生はその環境や利用者慣れることが最初の課題になる。

障がい者支援施設の場合は、障がいのある入所者にどのような声掛けをしたら良いか、言葉が出ない入所者の思いをどのように受け止めたら良いのか、宿泊実習について行けるかどうかなど、様々な不安を持って実習が始まる。

児童養護施設の場合は、様々な家庭環境のために施設に入所している児童に受け入れてもらうことができるか、拒否されないだろうか、特に中高生とはどのような関りをもったらよいのかなど、児童養護施設ならではの不安がある。しかし、実習Ⅰと実習Ⅲが同じ種別の場合、その不安について少しは解消されているはずである。また、実習Ⅰの段階で施設の雰囲気に慣れているとも予想される。ということは、実習Ⅲは具体的な実習に入りやすいことが考えられる。以上のことから考えると、実習後の自己評価は高くなると思われるが実際

の自己評価は施設評価より低くなっていることが〈表5〉から読み取れる。

ではなぜ、自己評価が低くなるのだろうか。当該学生10名のうち6名が実習Ⅲで施設評価がA評価だった。つまり施設からの評価はおおむね良好だったと言えるが自己評価は低かったということである。同一種別での2回目の実習ということで、実習生個々が目標を高く掲げたこと、自分自身の評価を厳しくしたことが読み取れる。“慣れ”を甘く見るのではなく、課題や目標に結び付けて、より充実した実習につなげた結果だと思われる。

施設評価と自己評価の差異（実習Ⅰ・Ⅲとも同じ種別の場合） 〈表5〉

評価項目（観点・内容）	施設評価	自己評価	施設－自己
入所児（者）に積極的にかかわることができたか	5.6	4.9	0.7
入所児（者）との接し方は適切であったか	5.8	4.2	1.6
入所児（者）を理解するために工夫・努力する態度が見られたか	5.8	4.8	1
入所児（者）に対する言葉使いは適切であったか	6.2	4.1	2.1
入所児（者）の個性や特性を理解したかわりができたか	5.2	4.5	0.7
個別支援計画の内容や役割について学べたか	4.6	4.7	-0.1
記録として丁寧に、適切な表現がなされているか	5.6	4.8	0.8
記録として気づきや考察など十分な内容であるか	6	4.1	1.9
言葉使い、挨拶、身だしなみは適切だったか	6.2	5.7	0.5
実習生らしく学ぶ姿勢で、積極的な態度で実習できたか	5.8	5.1	0.7
職員の指導に素直に対応し責任のある態度がとれたか	6.2	5.1	1.1
保育士の仕事内容と職業倫理の理解は学べたか	5	4.6	0.4

注）誤差の合計 11.4（平均 0.95）施設評価平均 5.67

②実習Ⅰ・Ⅲが異なる種別の場合

施設の種別が異なる場合の自己評価はどのような傾向にあるだろうか。2回の実習は、全く異なる雰囲気施設であるため、実習Ⅲでは前述①のような“慣

れ”はなく、実習Ⅲ開始から不安を持ちながらの実習になることは実習生自身が最も感じている。つまり実習Ⅰでの経験を自分なりに反省し課題を見つけたかが重要になり、たとえ種別が異なっても実習Ⅲでの実践にいかにつなげ自分自身の応用力を発揮することができるかが鍵となる。そのような状況の中で、実習Ⅰでの経験を活かすことができるのは「記録として丁寧に、適切な表現がなされているか」と「言葉使い、挨拶、身だしなみは適切だったか」である。以上の状況下で種別が異なる実習先を選択した7名の施設評価と自己評価の比較し検証を試みる。

前述①と異なり、施設評価と自己評価の差異がほとんどないことが〈表6〉からわかる。その中で「記録として丁寧に、適切な表現がなされているか」のみが施設評価と自己評価の差異が大きくなっている。この差異は同一種別で2回の実習をした学生（〈表5〉参照）の施設評価・自己評価の関係性と類似している。実際の実習施設が初めての経験とすれば、自己評価では“自分なりによく頑張った”という実習Ⅰでの自己評価と同じような評価をすると考えられる。しかしその中で実習Ⅰと共通する項目では課題を見つけた上で自分なりの反省を行い自己評価につながったものと考えられる。

施設評価と自己評価の差異（実習Ⅰ・Ⅲが異なる種別の場合） 〈表6〉

評価項目（観点・内容）	施設評価	自己評価	施設－自己
入所児（者）に積極的にかかわることができたか	6.14	5.88	0.26
入所児（者）との接し方は適切であったか	5.29	5	0.29
入所児（者）を理解するために工夫・努力する態度が見られたか	5.57	5.86	-0.29
入所児（者）に対する言葉使いは適切であったか	5.86	5.57	0.09
入所児（者）の個性や特性を理解したかわりか	5	5	0
個別支援計画の内容や役割について学べたか	5	4.71	0.29
記録として丁寧に、適切な表現がなされているか	5.29	4.43	0.86
記録として気づきや考察など十分な内容であるか	5	4.71	0.29

言葉使い、挨拶、身だしなみは適切だったか	6.14	6.43	-0.29
実習生らしく学ぶ姿勢で、積極的な態度で実習できたか	5.88	5.86	0.02
職員の指導に素直に対応し責任のある態度がとれたか	6.43	5.86	0.57
保育士の仕事内容と職業倫理の理解は学べたか	5.57	5.57	0

注) 誤差の合計 2.09 (平均 0.17) 施設評価平均 5.60

[4] 施設実習の課題

保育実習指導は、評価点を良くするために指導するのではない。あくまでも保育士としての資質向上のため、実体験を通して学び、課題を見つけ、卒業後の仕事に役立てるためである。それぞれの実習では、実際に観察やかかわりを通して自分自身の経験を増やす。その経験を具体的かつ的確な表現で実習ノートに記入する。経験を思い出して記録することで客観的に自身の実習を見直すことができる。

しかし、実際に実習ノートを確認すると、実習Ⅰでは具体性に欠けた記録が多く見られた。“積極的に”や“具体的に”という抽象的な言葉は学生にとって解釈が難しいこともあり、学生にとっての学びには十分につながらなかったとも言える。もっとも、実習ノートの的確な記述が施設実習の第一目標ではない。

施設実習で求められることは「一人ひとりを大切に」である。そのためには観察や参加が大切になるが、利用者それぞれに興味を持つこと、疑問を持つこと、的確な対応を試してみること、反省すること、次につなげていくことなどが求められる。

[5] 実習指導と実習体験という学び (アンケート結果から) (<資料1>参照)

前述 [3] で登場した学生たちが、卒業後半年が経ちそれぞれの職場で経験したことは得難いものだ。新人だからこそ感じる新鮮な職業意識。保育実習を

通じて、それらがどのように影響したのか、アンケートを通して垣間見える。(17名に発送7名から回答あり)

アンケート結果（カッコ内の数字は5段階評価）

<1>保育実習ⅠB（施設実習）について

①5段階評価：4.14

- ・現職に直接つながる実習だった（5）
- ・支援員の仕事として叱ったり厳しくすることも大切だと学んだ（5）
- ・基本的支援を学んだ（4）
- ・障がいのある方に対する考え方が自分の中で変わった（3）
- ・年齢層の高い利用者に関わることで子どもたちとは違う環境を知ることができた（3）
- ・障がい者支援と保育の知識は共通する知識が多かった（4）
- ・実習ⅠBでの経験が今の職場を選んだが、毎日楽しく充実している（5）

②5段階評価：3.86

- ・「次の実習に向けて」という面でとても良かった（4）
- ・利用者の発言の意図を考えずに書いていたが、面談で新しい角度から考え、実習を振り返るきっかけになった（4）
- ・自分自身の足りないところを見直すことができた（4）
- ・実習ⅠBは障がい者施設、実習Ⅲは児童養護施設だったので直接的に役立ったかはわからないが、実習の反省や話を先生とすることができたので良かった（3）
- ・自分ができていることとできていないこと（課題）に気づくことができた（4）
- ・疑問を解決できる機会があると次の実習に活かせると思う（4）
- ・評価が良かったところを、再度ほめてもらって自信につながった（4）

<2>保育実習Ⅲについて

①5段階評価：4.71

- ・雰囲気の違い施設を見ることができて良かった（5）
- ・施設の特性上、ただ時間を過ごすという支援が多かったが、リハビリパンツを使わない支援ということに驚いた（4）
- ・障がいに対する考え方が変わった（5）
- ・体験したことや実習ノートを思い返したり見返したりしたとき、今の自分の関わりについて考えることがある（5）
- ・利用者と関わり信頼関係を築き上げることは子どもに関わる上で大切だと思う（5）
- ・心理学に興味を持った良いきっかけになった（5）
- ・良くも悪くも、現場の実際を見ることができた（5）

②5段階評価：4.43

- ・親身になって話を聞いてもらって良かった（4）
- ・良いところだけではなく、自分が疑問に思う支援を見つけることも実習のひとつであると分かり、利用者の立場になって考え支援する大切さがわかった（4）
- ・将来に向けて自分自身の反省ができた（4）
- ・先生からのアドバイスをふと思い出して、自分がしている関りについて考えることがある（5）
- ・様々な利用者がいて、それぞれ得意なことを見つけて、それを活かす大切さが参考になった（5）
- ・児童養護施設が向いていると思わせてもらい自信がついた（5）

<3>保育実習ⅠBと保育実習Ⅲとの比較について

①5段階評価：4.43

- ・実習Ⅲでは実習ⅠBで見えてきたものがあったため、気が少し楽だった（4）

- ・実習ⅠＢより実習Ⅲの方が、より仕事に向けての意識を強く持って臨めた（５）
- ・実習Ⅲは自分から積極的に利用者に関わることで気持ちの共有ができた（５）
- ・実習Ⅲでは自分が希望する施設に行くことができたため、実習前の気持ちは違ったが、実習が始まると精一杯頑張ろうという気持ちは実習ⅠＢもⅢも変わらなかった（４）
- ・実習Ⅲでは実習ⅠＢで学んだことを活かさなければとプレッシャーを感じた（５）
- ・慣れや視野が広くなると思った（４）
- ・実習ⅠＢは何も分からず行ったが、実習Ⅲでは少しわかった上で自信を持って臨めた（４）

②5段階評価：3.86

- ・実習ⅠＢと実習Ⅲの充実度は違った（４）
- ・実習ⅠＢでは実際の介助を行ったが、実習Ⅲは見守りが多かった。見守りの大切さは今なら理解できるが実習としては物足りなさを感じた（４）
- ・実習ⅠＢは緊張であり覚えておらず、実習Ⅲはいろいろな体験が楽しかった（５）
- ・実習Ⅲの児童養護施設では、子ども同士のトラブルが毎日あり、職員との話し合いや反省をすることが多く、日々の学びになって充実していた（４）
- ・経験が少しでもあると、自分なりに考えて動けるようになったと感じた（４）
- ・園ごとの特色があったが、どちらも充実していた（４）
- ・どちらも、とても濃く中身のある実習ができたと感じる（２）

<4>その他

①5段階評価：4.43

- ・施設実習前と実習後では利用者を見る目や感じ方が変わった（５）
- ・高校の時から関わってきたので、特に変わることはなかった（２）
- ・障がいがあっても人は人であり、自分たちと同じ人間（５）
- ・実習ⅠＢの障がい者施設での実習前は“障がい者が怖い” “どう関わればいいのか”とわからなかったが、実習後はその気持ちはなくなった（５）
- ・利用者に関わることで、一人ひとりが持っている個性を知り、優しさや思いやりの気持を見習いたいと思った（５）
- ・教育・保育（保育実習）と支援（施設実習）は違うと知った（４）
- ・想像でしか理解できなかった部分が、目の当たりにすることで良く見ることができた（５）

以上のような返答が7名の卒業生から寄せられた。それぞれが実習の成果と現在の仕事をきちんと検証し、さらに成長した姿を見せている。

自由記述欄には「私はもともと、保育の道を希望していたため、実習の場所を選択するときに保育所を選ぶか、前から一度は実習したいと思っていた児童養護施設を選ぶか本当に迷った。保育園の保育士になった今、児童養護施設を希望して本当に良かったと思う。子どもや利用者に向き合う気持ちを考える、ということだけを考えて体験でき学べた実習期間は本当に貴重だった。」「現在は重度の障がい者施設で働いている。言葉でのコミュニケーションや一人での生活困難等、保育園や児童養護施設とはまた違う施設だが、実習で学んだ知識や支援は、利用者の考えていることを予測するときなどに選択肢が増えて、相手の目線に立つこと、人との関わり方と距離感などに活かしている。」などの記載があった。

また保育園保育士希望から施設保育士に就職先を変更した学生もいた。その際には保護者からの反対があったというが、施設実習と保育所実習を経験し、3回目の保育実習は施設実習（実習Ⅲ）を選択した。その経験が大きく影響、卒業後は障がい者支援施設に就職、現在は職場で貴重な戦力として充実した毎

日を過ごしている。後輩の実習時には、心配事はないかなどアドバイスを送ってくる。消極的だった在学中から大きく成長した姿を見せ、就職先を変更したことが間違いではなかったことを証明している。

5. まとめ

保育士養成校である本校に入学し、当然のように入学前から保育士資格を取得するための学びが始まる。学生の中には幼少のころから、あるいは中学時の職場体験での経験など、それぞれの思いや理想から進路に関する自己決定を行ってきたはずである。高等学校までの自身を取り巻く環境や自身の能力などにも影響されながら、卒業後の進路を考えてきたものと思われる。しかしそれまでの自己決定とは異なり、保育士を目指しながら岐路に立った時、どのような選択をし自身の方向性を見い出すかは、大学・短期大学など高等教育での学びや経験が大きく影響することも事実と言わざるを得ない。本学学生にとって、卒業後の進路を考える際には、現実を直視しながら本学での学びや経験が重要な判断基準となっている。

以上の観点から、卒業後の進路に如何につなげるかは保育実習指導の内容に係わる課題でもある。特に、わかりやすい保育所実習ではなく、より分かりにくい施設実習での体験は進路決定をする上での重要なポイントになることは否めない。

施設実習指導で求められること

筆者は就職指導や実習指導をする際に、自身の長所を思いつかず書くことができない学生に出会い驚くことがある。自身の長所が思いつかない学生には、友人や家族からは何と言われるのかと聞き直し、考える時間を与えるようにしている。考え方を提示することで、他者からの見方を思い出すようになる。宮

下（2008）は「自分の内面について吟味の経験がほとんどない者や、自己の周囲や社会等の諸現象に関して自分の考えをほとんどもたない者がいることを知り、愕然とすることがある。履歴書に自分の長所や短所を書く際に、まったく思いつかず、他人に聞いている姿を見かけたことがある」（21）と、現代学生の特徴を述べている。

宮下は現代の大学生のアイデンティティ（自我同一性）形成を阻害する要因として、友人関係の希薄さ・大人モデルの不在・「問いかげ」の消失・実感の乏しさ等を指摘している。発達心理学者エリクソン・E・H（1902-1994）はモラトリアムという言葉で、青年期はアイデンティティを確立するために必要な期間であり社会的に保証されるべき、と提唱した。しかし実際には自分は何者かなど自問自答し試行錯誤をする期間も短く、周囲から敷かれたレールに乗りながらプレッシャーを感じているようにも思える。その原因として、経験が少なく、失敗を恐れるあまり型にはまった行動しかできないと思い込んでしまうような現代社会での生活の中で、アイデンティティ確立期の社会的保証はない。筆者は社会でよく使われる“普通は”という言葉が学生たちにとって“そうあらねばならない、普通から外れるわけにはいかない”などの思いに至り、彼らの個性を狭めてしまっているようにも感じている。

以上のような現状の中で、施設実習は「利用者ひとりひとりを大切にする。普通は、という考えではなく、個々の違いを認める」という基本に立つ。保育士養成校としての座学を通して習得される知識は、施設実習という実学で活かされ、その上で施設職員のあり方や厳しさを実感し、同時に技術を習得することになる。実習現場では、今までの生活であまり経験してこなかった自問自答や試行錯誤が要求されるが、考えること・感じる事が学生たちにとって難しいことも事実だ。実際に二週間にわたる施設実習（宿泊実習）は初めて体験することばかりであり、学生はいわゆる“普通”ではない利用者と関わることでこの困惑から始まる。しかし、この貴重な実習体験で、施設での保育士の役割とは何かという最も基本であり最も難しいことを具体的に体現することで学生た

ちは自身のアイデンティティを形成していくことにもつながると思われる。

施設実習指導では前述のような利用者に対する理解以外に実習での注意事項も伝える。施設種別により注意事項は異なるが、共通する部分も多くある。その中のひとつは実習ノートの記述に関する指導である。筆者は学生たちに、見る・感じる・考える・課題を見つけることの重要性を様々な授業で伝えてきた。また、自身の考えを他者に伝えることの必要性も伝えてきた。しかし実際に記録する時点で、言動の事実のみの記述が多く見られる。実際に体験したエピソードの記述をすることにより、自分自身しか知らない感情や思いなどを客観的に見つめなおす機会にもなる。実習での利用者との関わりに感想や自身の仮説などを付け加えて記述することは、利用者への対応や言動を反省し、次の課題を設定することに役立つ。また施設職員にとって、実習生の新鮮な感想などは、初心に戻り改めて利用者と向き合うヒントにもなる。具体的な記述や利用者の言動に対する仮説や感想は筆者が実習ノートを確認・検証する際にも大いに役立ち、実習の様子がイメージできる大きな役割を果たすものでもある。しかし実際には仮説や感想まで書く学生は少なく、書く意味を丁寧に伝えることが必要になる。

保育実習では実習生としての態度も問われる。施設評価ではおおむね良好な態度であることが記されている。しかし、言葉遣いを指摘されることがある。特に障がい者支援施設では目上である利用者に対する言葉遣いを実習前には指導しているが、普段使い慣れていないような丁寧語や敬語を心がけること自体が難しい。また、利用者の居住場所であり、“家”であるという意識を持って実習をするような指導も重要なポイントであることは言うまでもない。

施設実習では常に利用者の立場にたち、自分自身を見つめ反省しながら実習を行うことが求められるが、そのための指導では学生たちが自分自身の課題として考えることができるように伝えることが求められる。

これからの実習指導

本稿の検証により、施設実習指導を充実させ意味あるものにするためには次のような課題が見えてきた。

①実習前の個人面談の必要性

現在の実習指導では実習前に時間をかけた個人面談はしていない。何をどのように考えて実習に望むのか、実習目標や課題の設定、実習ノート記入の仕方などは時間をかけて伝えているが、それは施設実習を選択している学生全体に向けた指導である。

実習Ⅲと実習Ⅰとの関連性について前述のとおり、実習Ⅲでの個々の目的に合わせた実習施設を決定することが、実習での充実度に関わってくる。実習Ⅰと同じ種別の施設での実習Ⅲで課題を挙げて、さらに充実した実習を希望するのか、いろいろな施設での経験を積んでおきたいということで実習Ⅰとは異なる種別で実習Ⅲを行うのか。実習生個々の希望や思いをしっかりと受け止め、より細かい確認作業が重要になる。以上のように実習Ⅰとの関連を考えた上での実習施設を希望通りに決定できるような指導が課題となる。

②実習Ⅲにおける実習施設の選択

しかし前述のとおり、実習Ⅲの施設決定は第1希望の施設には受け入れてもらえることが少ない。充実した実習を行うためには早期のうちに実習Ⅲの希望施設に依頼し了承をもらうことが必要になる。実習施設を決定する場合、本人の性格や目標によって、種別を同一にするか、異なるものにするかを決める必要がある。また実習Ⅲの学びを卒業後の進路にどのように結び付けるかは大きな課題となるが、そのための指導はさらに重要であることは言うまでもない。

鈴木(2008)は、経験によって獲得される「賢さ」に言及している。知的能力は、知能検査で測られるIQではなく、「現実世界の具体的な問題にうまく対処す

る能力」(107)であり、経験を重ねていけば自然に身につくのではなく、「経験を自発的に吟味し、次に何をすべきかを考えること―すなわち経験へのコミットメントが重要」(224)であると指摘している。つまり、「内省や状況との対話」があって初めて経験が活かされ「実践知の発達を促し個人差をもたらす」(225)としている。鈴木はさらに、知的能力は経験によって変わるのではなく、「その個人(主体)はどのような経験をしようと思ったのか」(225)が重要であるとした。卒業生のアンケートからも、反省や振り返りがいかに貴重だったかということを証明している。

③コミュニケーションの学びの場

実習を行うにあたって、利用者とのコミュニケーションや意思疎通について不安を感じている実習生は多い。実生活で関わるのがほとんどない施設利用者に対し、どのような声掛けをしたら良いかについて、実習開始後数日はほとんどの学生が感じて悩む日々が続く。実習前指導ではその点について丁寧に伝えるのだが、現場に入り、初めて実感となる。

細川(2019)は、「人と話をするときに、どういう言い方をするかということばかり、気にしていませんか?」と問いかける。細川は対話には技術や方法を習得することが必要であると言われるが、それ以前に人格を表すとも主張している。

実習施設での対話対象である利用者は、それぞれ異なる人生・背景・特性などがある。その利用者に対して“対話”を求めようとする場合、利用者ひとりひとりと如何に関わるかが問われる。困惑した実習生は施設職員に声掛けについての質問をしているが、挨拶はするようにと指導を受ける。細川は他者とつながり理解する第一歩を「目が合ったら微笑む(にっこりする)」ことが必要という。実習施設で指導を受ける“挨拶はするように”ということは“微笑む”と同様に“あなたのことを気にしている”という意思表示になる。

実習前に不安を感じている学生には、以上の点を丁寧に説明し、少しでも不安感を払拭する指導が求められる。

6. おわりに

施設実習はアイデンティティ形成に向けて大きな経験になることは言うまでもない。実習以前は自己肯定感が低かった学生も、保育実習を経験することで、自己肯定感を少しでも高めることができればとの思いがある。前述の学生Eは実習Ⅰの時点で自己肯定感が低かったが実習Ⅲでは自分自身を知った上で、学びにつなげ施設評価と自己評価とも高めることができた。クリストフ・アンドレら（2000）が自己評価の3本柱とした中の「自分を肯定的に見る」「自信を持つ」について、学生Eの実習Ⅰから実習Ⅲへの経過が証明していると言える。

施設実習は単に資格を取るための経験としてのツールではない。人生経験の1ページと考え、自分自身を見つめなおす機会でもあり自己肯定感を高めていく機会でもある。さらに実習の経験を通して内省する最も適した機会でもある。

学ぶということは座学であれ実学であれ、楽しいはずである。わからなかったことについて知ることができ、視野が広がってくる。そこに喜びを感じることができれば、学ぶことも楽しい。しかし学生と接する中で、どのように学ばせ、どのように楽しさを提供するかが我々大学教員には課せられている。座学での学びと実学での学びを交互に行うことにより、より深い洞察力と知的能力を身に付けさせ、自身の活躍の場を自分自身で切り開く力をつけさせることこそ、大学教員の使命だと感じている。

<謝辞>

本論文の作成にあたり、アンケートにご協力いただきました卒業生に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・青木仁志著『目標達成の技術』
アチーブメント出版・2012.10 発行
- ・一般社団法人全国保育士養成協議会編
『保育実習指導のミニマムスタンダード「協働」する保育士養成』
中央法規・2018.7 発行
- ・上淵寿編著『キーワード動機づけ心理学』
金子書房・2012.11 発行
- ・クリストフ・アンドレ著・高野優訳『自己評価メソッド』
紀伊国屋書店・2008.7 発行
- ・クリストフ・アンドレ&フランソワ・ルロール著・高野優訳『自己評価の心理学』
紀伊国屋書店・2000.8 発行
- ・公益財団法人児童育成協会監修『新基本保育シリーズ⑩保育実習』
中央法規・2019.2 発行
- ・鈴木忠著『生涯発達のダイナミックス～知の多様性 生き方の可塑性』
東京大学出版会・2008.6 発行
- ・立花直樹編著『施設実習』
ミネルヴァ書房・2019.5 発行
- ・田中利則監修『事例を通して学びを深める 施設実習ガイド』
ミネルヴァ書房・2018.5 発行
- ・西川ひろ子・山田修三・中原大介編『施設実習の手引き』
溪水社・2017.3 発行
- ・細川英雄著『対話をデザインする』
ちくま新書・2019.6 発行
- ・宮下一博・杉村和美著『大学生の自己分析』第2章
「現代の大学生の実像」(21-46)
ナカニシヤ出版・2008.4 発行